

哲学ジャーナル

「哲学ジャーナル」は、学期を通して定期的に（通常は毎週）作成・提出すること。内容は、あなた自身が授業内容とどのように向き合ったかを反映したものであり、自分自身の考えや経験に基づくものであるべきである。各回の分量は一〜二段落程度を目安とすること。三段落を超えるのは多すぎる。

この課題への取り組み方にはさまざまなものがあり、以下のリストもすべてを網羅しているわけではない。たとえば、次のような方向性が考えられる。

- 授業の中で、友人に話してみたいと思った内容について書く。それは何か。また、なぜその考え方・議論・概念・立場を共有したいと思ったのか。
- 授業の中で、自分の考え方が変わるきっかけになった内容について書く。それは何か。また、どのようにして自分の考え方が変わったのかを説明する。
- 文献の中で、自分が著者の考えに納得できなかった点について書く。まず著者がどのような主張をしているのかを説明し、そのうえで、なぜ自分はそれが誤っていると考えたのかを書く。もし著者本人と議論できるなら、どのように自分の考えを伝えるかも考えてみる。
- 授業の中で、十年後にも覚えていたいと思う内容について書く。それは何か。また、なぜそれを覚えていたいと思うのかを説明する。
- 文献の中で論証が出てきた場合には、その再構成を試みてもよい。まず論証の結論を整理し、そのうえで、著者がその結論を支持するためにどのような理由を提示しているのかを示す。
- 授業内容が、現実の世界や自分自身の生活とどのようにつながっているかについて書く。その内容はどのような問題に関わっているのか。また、その問題についての理解をどのように深めたり、別の見方を与えたりしたのかを考える。

- 授業の中で扱われた問いや問題のうち、自分が特に興味深い、あるいは難しいと感じたものについて書く。その問いのどのような点に惹かれたのか、あるいは難しさを感じたのか。また、それについて現在どのように考えているのかを説明する。
- 授業の中で、自分が同意できなかつた考え方について書く。それが何であり、なぜ自分は同意できないのかを説明する。そのうえで、どのような別の立場や議論のほうが説得力を持つと感じるのかも考えてみること。
- 授業内容の中で、自分が比較的良好に理解できていると感じるものについて書く。それは何か。また、どのようにしてそれを理解できるようになったのかを説明する。このテーマを学ぶうえで、特に役に立った方法や経験についても振り返ってみる。
- 授業内容の影響を受けた個人的な経験について書く。その内容は、その経験についての理解や考え方をどのように変えたのかを説明する。
- もっと深く学んでみたいと思ったテーマや問題について書く。また、授業内容がどのようにしてその探究を後押ししたのかについても説明する。
- 授業で扱われたテーマについて、クラスメートや授業外の誰かと交わした議論や討論について書く。どのようなテーマだったのか。また、相手の立場に対して自分がどのように向き合ったのかを説明する。
- 授業内容の中で、理解するのが難しいと感じているテーマや概念について書く。それは何か。また、どのような点を難しいと感じているのかを説明する。その理解を深めるために、自分がどのような工夫や試みをしてきたのかについても振り返ってみる。
- 授業の中で、ある考えが急に腑に落ちた瞬間について書く。それまで曖昧だったことが、どのように理解できるようになったのか。また、その気づきが授業内容全体の理解にどのような変化を与えたのかを説明する。

- 授業内容が、自分の信念や価値観にどのような問いを投げかけたのかについて書く。どのような内容が自分にとって挑戦的だったのか。また、その問いに対して自分がどのように考えてきたのかを説明する。

- 授業内容の中で、世界に対して最も肯定的な影響を与える可能性を持っていると思うテーマや概念について書く。それは何か。また、なぜそのような可能性があるかと考えるのかを説明する。

繰り返しになるが、以上はあくまで一例であり、学生は自分に合ったやり方で自由にこの課題に取り組んでよい。

この課題にどう向き合うか

この課題について最も重要なのは、「私のために書くのではない」ということである。あなたは、自分自身の思考を深めるためにこれを書いている。

この課題にうまく取り組めているかどうかを判断する基準は、実はとても単純である。書き終えたあとに、「これは自分にとって意味があった」と本当に感じられるのであれば——その「意味」があなたにとって何を指すとしても——それは良いジャーナルであり、この課題にも適切な形で向き合えているということである。

逆に、それが「ただ終わらせなければならない課題」のように感じられたなら——つまり、やるように言われたからこなしただけの作業のように感じられたなら——おそらく、この課題への向き合い方は適切ではない。この課題の目的は、何かを「作り上げる」ことではなく、書くことを通して考えることにある。

だからこそ、この課題には唯一の「正しいやり方」があるわけではなく、上のリストもあくまで出発点にすぎない。内容によって適した書き方は異なるし、良い

ジャーナルかどうかを決めるのは、型に当てはまっているかではなく、それが実際に自分の思考に役立っているかどうかである。

継続的な対話

このジャーナルは、学期を通して、私とあなたとの継続的な対話の場にもなる。私はあなたの記述を読み、多くの場合、かなり詳しく応答する。ただし、ここで重要なのは、私はそれを採点しているわけでも、添削しているわけでもないということである。私は、あなたと対話しながら一緒に考える相手として関わっている。

あなたがある考えについて掘り下げて考えているとき、私は、別の哲学者と議論するときと同じような形でそれに応答する。自分が同意できない点には疑問を投げかけたり、あなたが見落としているかもしれない観点を指摘したり、別のつながりを示したり、「この反論にはどう答えるか」を問い返したりすることになる。

私の応答について、一つ理解しておいてほしいことがある。これは多くの学生が慣れているやり方ではないのだが、私はほとんどの場合、異論を述べたり、疑問を投げかけたりする。ここで重要なのは、その応答をどう受け取るかを理解することである。というのも、多くの人は自然と、それを逆の意味に読んでしまうからである。

私があなたと多く議論し、強く異論を述べ、積極的に疑問を投げかけるほど、それだけ、あなたのジャーナルを興味深いと感じているということである。異論や批判は、あなたが十分に考えられた内容を書いていること、議論するだけの中身があること、そして私たちの思考を前に進める何かがそこにあることの表れである。私にとって、異論や批判は、そのジャーナルに対して与えられる最大級の評価である。

逆の場合も同じである。私がただ単にあなたの文章を褒めているだけなら、むしろ少し気にしたほうがよい。ここでの賞賛は、多くの場合、私が掘り下げて議論できるだけのものがそこになかったことを意味している。つまり、その記述が安全なところに留まり、「確かにその通りではあるが、それ以上には進まない」内容にとどまっていた、ということである。

したがって、もしあなたが受け取った応答にほとんど異論や疑問が含まれていなかったとしても、それで安心するべきではない。むしろ、そのジャーナルで本当に思考上のリスクを取っていたのか、それとも安全なところに留まっていただけなのかを、自分に問い返してみしてほしい。

したがって、私の応答を読むときには、普段とは逆の受け取り方をする必要がある。多くの異論や批判は、むしろ良い兆候である。一方で、賞賛ばかりの場合は、次回はさらに一歩踏み込んで考えてみるべきだ、という合図であることが多い。